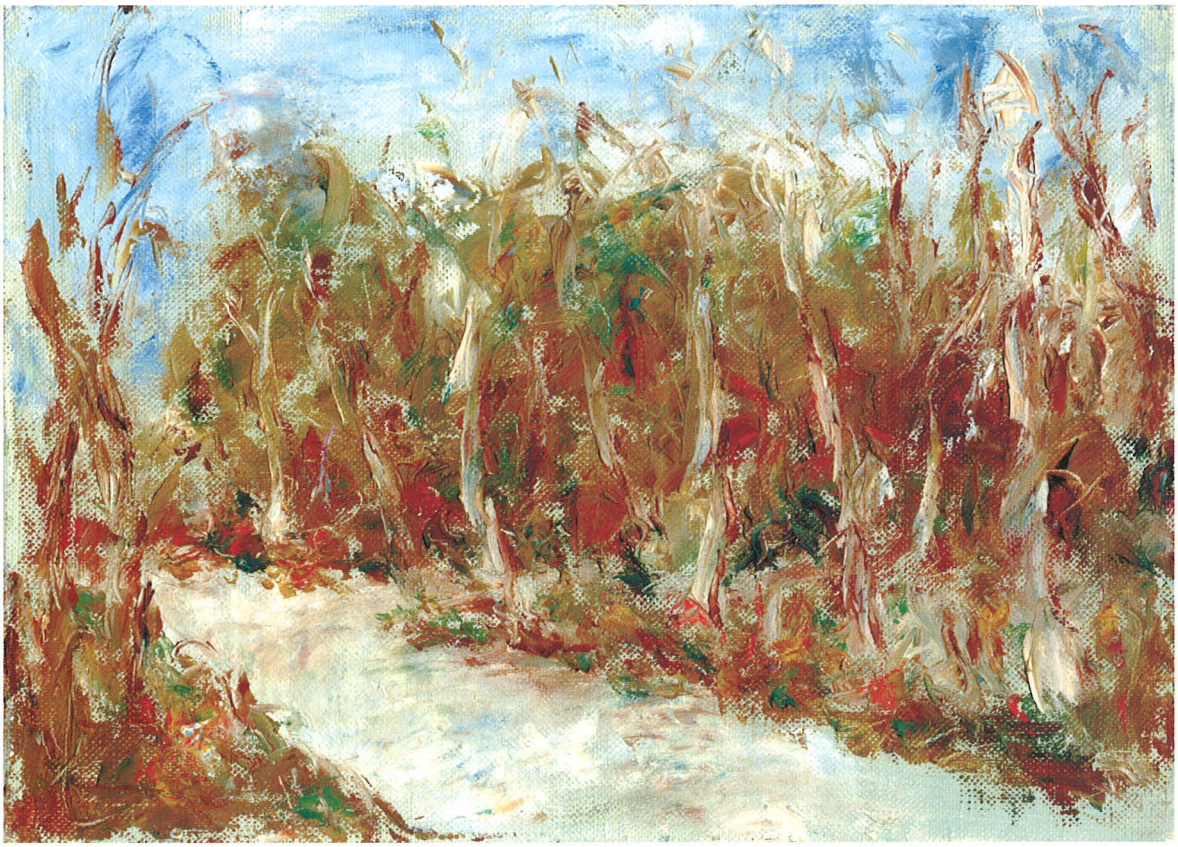
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2000年5月 NO.95



「自然の一角」 浜田耕一

〈もくじ〉

沈黙の世界 …… 橋田憲明 2
土佐弁はスーパー日本語？ …… 筒井由美子 3
第16回高知市都市美デザイン賞講評 …… 吉田 晋 4～5
第10回高知出版学術賞の審査を担当して …… 中内光昭 6～7
キレイな写真と伝わる写真 …… 和田健一 8～9
北川村「モネの庭」マルモッタンの開園をむかえて …… 安岡一幸 10～11
動く美術館 …… 北村修啓 12
ぐうの音も㈠ －詩作りと誌作り－ …… 西岡寿美子 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

沈黙の世界

橋田憲明

俵万智さんは、『恋の歌100首』の中で、「ポケットベルを持つ恋人同士は、終わりが早い」という友人の考えを紹介している。互いの居場所や行動を常に把握したいという気持ちは、恋人同士ならもつであろう。友人は言う。「でも、それが実現してごらんよ。あんがい興醒めだよ。まったく謎がないっていうのは、想像力の働く余地がないってことで、それって恋愛をつまらなくさせるだけじゃないのかなあ」。会いたいなあ、声がききたいなあ。どうしているのかなあと、思いこがれる時間があって恋をつのらせる。昨今、携帯電話はますますふえて若い人たちは側目（そばめ）には楽しくやっているようである。世は速く流れて、味わう時をなくしている。そんな折りも折り、生活の中の「間」の効用をさりげなく示してくれている。

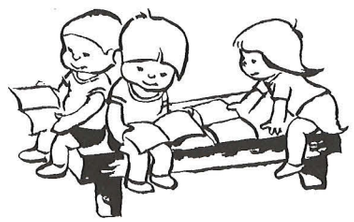
便利は想像力を弱らせる。量販店にいくと欲しいものを何でも手に入れることができる。季節をこえて、野菜も果物も並んでいる。農作業にたずさわる人の苦労にまで、気持ちは向くこともない。世の中から人生の味わいを深くする想像力が、だんだん弱まっていくのではないかと気がかりになる。想像力によって人間は見えないものも見ることができる。世相に「おもいやり」の心の不足が嘆かれるが、これも想像力の不足と関係があるように思えてならない。便利にしらずしらず麻痺させられて、大切なものを失っていくことがおそろしい。

黙っていた方がいいのだ／もし言葉が／言葉を超えたものに／自らを捧げぬくらいなら

『あなたに』に所収されている谷川俊太郎の作品である。「言葉を超えたもの」へのあくなき信仰が、作家の創作への意欲をかきたてるのである。すぐれた詩歌は常に沈黙の世界の上に成立しているといってもいい。読者は、ことばとことばの間の、行と行との間の緊張した沈黙の中から言葉を超えたものを引き出してこなくてはならない。読者のよろこびはそこにある。文学はゆたかな想像力と感受性に支えられている。それが読み手、書き手に失われると、文学はもはや存在し得なくなる。

子どもが本ばなれしているという。本の楽しさを知らないのである。身近にテレビ、ファミコンとおもしろいことがいっぱいあるし塾にもいかねばならない。松岡享子さんは、『こども・こころ・ことば』（こぐま社）の中で、子どもたちに本のたのしみ方が弱くなったことを憂えて、「本をたのしむためには、たのしむ能力（ものを感じとる力、ことばからのイメージをひき出す力）をつけなくてはと書いていて私も同感である。本を読むことは、字を読むことではない。大人になっても読書のよろこびは、文章と文章の間、言葉と言葉の間にある余情をくみとるところにある。それも子どもの頃からつちかわれた想像力、創造力、感受性に支えられる。

言葉は、もともと沈黙とともにあるものである。しかし今日、ことばは沈黙の世界からはるかに遠ざかり、世はおしゃべりに満ちている。一つ一つの言葉を心こめて使うことを忘れ、心をこめて読むことを忘れかけている。



沈黙は人生の味わいを深くしてくれる。沈黙は想像の世界と同居している。想像は愛（おもいやり）をも育む。その沈黙はいま騒音にうち消されて隅に押しやられている。しかし沈黙はまだ消滅したわけではない。人々の心の中になお生きている沈黙をいまのうちにとりもどさなくてはならない。

（はしだのりあき／高知県立文学館館長）

土佐弁はスーパー日本語？

筒井由美子

日本語学校の研究発表会にて学生と（右が筆者）

私は、外国人に日本語を教える日本語教師をしています。と言うと、だれもが、外国語ができるの？と聞いてきます。いいえ、そうではありません。授業では、日本語しか使わないのです。日本語がまったくわからないクラスでも、日本語だけで授業をします。その手法は〝直接法〟と呼ばれているものですが、ベースにあるのは「言葉は言いたいことがあるところに生まれる」という考え方です。そして、その言いたいことを言うためにどのような表現を使うかを教えるわけです。つまり、母国語を日本語に置き換えていくのではなくて、言いたいことを日本語で表現する学習を積み重ねていくのです。

具体的な教授方法はここでは述べませんが、この方法の長所は、その言語の使い方そのものが教えられるということです。例えば、直接法で学んでいない学生は、名前を言うとき必ず「わたしは〇〇です」と言います。そして「あなたの名前は何ですか」と言います。この日本語は正しいでしょうか。文法的な間違いはありません。でも、普通はそのようには言いません。「お名前は？」「〇〇です」というのが最も自然な日本語ではないでしょうか。電話で「もしもし。わたしは〇〇です。あなたは××先生ですか」なんて言われたら、う～ん、と唸りたくなりませんか。直接法は、このようなことは避けることができます。もちろん、直接法でなければ避けられない、ということはないのですが。

授業の中で、どうもやりにくいと思うことがあります。共通語でなくて土佐弁ならいいのに、と。一番そう強く思うのは、「～ている」という表現を教える時です。よく知られているように、土佐弁では「～ゆう」と「～ちゅう」とに分かれる表現が、共通語では一つしかありません。例えば「着ている」は第一義は「着ちゅう」ですが、文脈によっては「着ゆう」にもなり得ます。「彼女は着物を着ている。きれいだね」は「着ちゅう」、「今着物を着ているから、ちょっと待って」は「着ゆう」です。着終わっている状態と着ている最中とが、まったく同じ表現だなんてひどい、と思うわけです。窓を開けて「あ、雪が降っている」と言うと、「降りゆう」も「降っちゅう」も可能性があるのです。ひどい。

そういうわけで、「～ている」の使い方は、日本語の中で最も難しい項目の一つになっています。わたしはひそかに、本来の日本語は土佐弁のように、二つの表現が存在していたはずだと思っているのですが。

もう一つ例を挙げると、禁止の言い方です。共通語では、「～てはいけない」という複合表現を使わなければならず、動詞の活用変化でこの意味を伝えることはできません。土佐弁では、「行かれん」「食べられん」というのがあります。共通語で同じ形の「行かれない（＝行けない）」「食べられない」というと、可能形の否定になります。土佐弁の可能形の否定は「行けん」「食べれん」という形があります。この可能形は状況可能つまり周囲の状況が原因で可能・不可能であることを表し、能力可能は別の形の「よう～する・せん」があります。例えば、「今日は泳げん」と「私はよう泳がん」とは、異なった意味の可能形ですね。共通語では、このような状況可能と能力可能の違いはありませんから、どちらも「泳げない」または「泳ぐことができない」と言います。

これだけでも表現力の違いがわかるでしょう。土佐弁はこのように豊かな言葉です。いつまでもこの豊かさが保たれることを心から望みます。

（つついゆみこ／インターカルト日本語学校信濃町校校長）

第16回高知市都市美デザイン賞 講評
「しなければいけないこと／したくて仕方ないこと」

吉田　晋

マリオ・チッポリーニという自転車ロードレースの選手がいる。イタリア最強のスプリンターである彼は、イタリアで最も人気のある選手である。長身痩躯に甘いマスクのヤサ男。マリオは、いつも赤いレーサーパンツでレースに臨む。だが、そのレースに赤いパンツで出場することは禁止されているのだ。でも、彼だけはいつも赤いパンツを履く。レースのたびに罰金を払っているのだ。僕はマリオのこういう姿は非常に美しい、と思う。

しかし、この世には「しなければいけないこと」がたくさんあって、「マトモ」な人たちは、「しなければいけないこと」を追いかけるのが人生だ、なんて思っているわけではないにしても、それを追いかけるのに日々忙しい。そうやって忙しくしていると、世間も「マトモ」な人だとみてくれるから、なかなかそういう生活から抜け出ることが出来ない。しかし、「しなければならないこと」より「したくて仕方ないこと」を見つめて、そっちと真正面から向き合えればどんなにいいだろう。チッポリーニのように。しかし、最も困難でかつ最もエキサイティングなことは「しなければいけないこと」を「したくて仕方がないこと」にできることである。

建物のデザインにおいて、「しなければいけないこと」とは使い易いことであったり、価格を抑えたり、周辺に配慮したり、キレイな見た目にすることである。「マトモ」に考えるなら、これらすべてに配慮をしてデザインすることが重要なのだ。なんてったって、デザインにはバランスがダイジだからなぁ……。「都市の美しさ」についていえば、基本的にはそういったバランスの意識レベルがその都市のスタンダードを決定するといってよい。ただ、そういったことはあまり、ワクワクしたりドキドキしたりするようなことではないな、と思う。ちょうど各パーツのバランスのとれた、いわゆるキレイな顔よりもどこかアンバランスな味のある顔のコを好きになったりするように。そういったバランス感覚をふまえた上でその先にあるものを追求しようとする姿勢はリアルである。

高知市都市美デザイン賞も今回で16回を迎えました。私を含めた各選考委員による現地調査と議論の結果、特賞1点と入賞2点が選ばれました。なかでも特賞は、昨年の第15回に続いての選出となります。高知を代表する場所にある「高知らしい」建物であると同時に、そのデザインは世界的にみても、斬新かつ野心的な水準にあります。「しなければいけないこと」と「したくて仕方ないこと」が一致している例でしょう。全体的には「環境を読む」ことがテーマになる傾向が見られました。

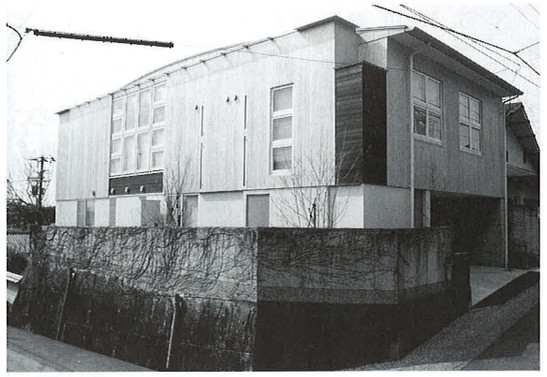
〈特賞〉　高知県立牧野植物園　牧野富太郎記念館

環境を読む1：尾根をつなぐ屋根

特賞　高知県立牧野植物園
牧野富太郎記念館
（発注者：高知県、設計者：㈱内藤廣建築設計事務所　代表　内藤廣）

高知の歴史・風土、五台山という場所、を読み尾根のラインをつなげる屋根型は、ヒラメの骨と濡れ落ち葉をイメージしたものであり、この建物をユニークなものにしている。

この五台山に伏せるような屋根型は、集成材の形状、ダイキャストの鋳物ジョイント、など高度な建築技術が控えめに盛り込まれているのは驚きである。柔らかく囲む稜線、床・壁・天井とふんだんに使われている高知県産の木材、低く深い軒、半屋外の外部空間、さまざまな植生から構成される2つの中庭、と高知のなかでもっとも「高知らしさ」を実感できる場所の一つである。穏やかなシンボリズム。今後、年月の経過に伴う植生の変化にしたがって、落ち葉が大地に還っていくように、ヒラメが砂地に身を隠すように、建物の外形が消え、さらに五台山に馴染んだ、植物の息吹が感じられる環境が形成されることを期待する。



〈入賞〉　山本邸

環境を読む2：街を眺める窓

入賞　山本邸
（発注者：山本修、設計者：山本修）

個人の所有物にすぎない住宅が景観形成や都市美に意味をもつとすれば、このように個人のライフスタイルあるいは好みがある普遍性を獲得している場合だろう。高知市北部の小高い住宅地に建つこの住宅は、「街を眺めながらの生活」あるいは「街を背景とする生活」という高知市内に住む人の一つの憧れの生活像を現している。緩やかなヴォールト状の屋根と木肌の見える白い外壁は配慮された細部とともに穏やかな表現でありながら、好ましい周辺環境を構成している。しかし、この住宅の特徴は高知市内を望むスペースとバルコニーにつきる。その佇まいには「こういう風に都市に棲みたい」という心意気が表現されている。

〈入賞〉　スーパーホテル高知

環境を読む3：街と対話するロビー

入賞　スーパーホテル高知
（発注者：㈲川上石油店　代表取締役　川上正章、設計者：㈲橋設計建築事務所　橋本健・㈱シティーエステート一級建築士事務所　宇都宮賢一）

雑多な街の中にあるバランス感覚に優れたビジネスホテルである。若干大きめのボリュームを必要とする建物ながら、外壁、植栽、サイン類などありがちな己を主張するだけのデザインではなく、周辺環境に配慮し、控えめながらセンスよくまとまっている。各室に付属の室外機を隠すパンチングメタルの規則的な配置はデザインの基調となり、1階レストラン部分はガラスを大胆に使用した明るく透明な印象を与えることに成功している。

サイト・スペシフィックなデザインとは、「場所を強く意識した」デザインの意味である。いうなれば、場所が決定するデザイン。今回は街の周辺環境というより地形をデザインコンセプトとして取り入れている建物が多かった。少なくとも移ろいやすい街の周辺環境よりも地形を意識するデザインはある意味では説得力があるだろう。そういったジオ・スペシフィックなデザインとバリアフリーなどといったユニバーサルなデザインを同時に成立させることが高知の街のスタンダードとなることを期待する。それが21世紀に向けたヴィヴィッドかつダイナミックな都市の美を生み出す土壌となるはずである。

（よしだしん／高知工科大学助教授・建築家）

第十回高知出版学術賞の審査を担当して

中内光昭

早いもので、一九九〇年に設けられた「高知出版学術賞」の審査も今年で十回目になる。もともと地味な賞ではあるが、十年の歳月と実績により、この賞もそれなりの市民権を獲得することができたようである。

それを裏づける一つのデータがある。今回の応募作品は二十五点であるが、そのうち八点は大手、中堅の出版社からの推薦で、このようなことは当初には全く見られなかったことである。

「伝記、郷土史関係が多く、自然科学関係が少ない」という傾向は従来通りだが、幅広い分野からの応募があったのも今回の特徴である。

全員での審査は二回に分けて行われ、第一回の審査で九点を候補作品とし、それらをひと月余りかけて、分担精読後、二回目の審査に臨んだ。

その結果、全員一致で次の三点が受賞作品に選ばれた。以下は、受賞作品の簡単な紹介である。

飛鳥井雅道著
『中江兆民　人物叢書二二三』
（吉川弘文館刊）

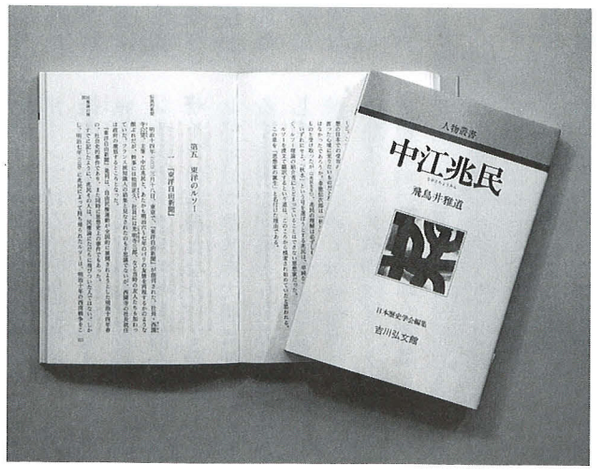
著者は、日本近代史の研究者（京都大学名誉教授）で、土佐が生んだ一群の思想家に強い関心を持っており、既刊の『幸徳秋水』『坂本龍馬』との、いわば三部作の完結編として世に問うたのが本書である。

本研究は、兆民の政治史、思想史、民権運動史での足跡を、厳格な学術的手法のもとに検証し、客観的かつ正確に、記述紹介したもので、兆民の人物像を、明瞭に浮かび上がらせることに成功している。

著名人につきまとう陰の部分にも淡々と触れているが、兆民が「一年有半」の域に達した時、過去のスキャンダルもスキャンダルとしての意味を失ったという著者の解釈も理解できる。

兆民の家に寄宿していた幸徳秋水との関係についても十分な説明があり、高知の明治史研究にとっても貴重な出版物である。

兆民に関する多くの研究書、伝記類の中にあって、いわば、「決定版」と言うべき出版物という評価を受けた。



野本寛一著
『人と自然と　四万十川民俗誌』
（雄山閣出版刊）

いうまでもなく、川は流域の人々の生活を根底で支える〝母なる〟存在であるが、一面、荒れ狂って危害を与える鬼でもある。このような川に依拠して暮らす人々の生活は、源流域、中流域、感潮域でそれぞれ独特の顔をもっていて、民俗学にとって興味深い対象と言える。

著者は〝川の民俗学〟の専門家で、今までに、赤川、大井川、天竜川、吉野川、熊野川などでの研究実績を持っている。

本書の基礎となっているのは、著者が、従来の成果と手法を基礎に、自ら歩き、聞き、見ることによって集めた膨大な資料である。本書では、これら資料をよく整理して紹介すると共に、これら資料をもとに、関連文献との比較考証を交えつつ、より広い視点からの考察を行っている。ただ、著者の従来の実績を踏まえる時、我が国の他の河川流域の民俗との比較、四万十川民俗の特性などについて、もう一歩踏み込んだ考察が欲しかったというのが率直な感想である。

厳密な実証と確かな方法論にもとづいており、従来の民俗学を抜け出した、広い視野を持つ研究として評価された。

依光良三著
『森と環境の世紀　住民参加型システムを考える』
（日本経済評論社刊）

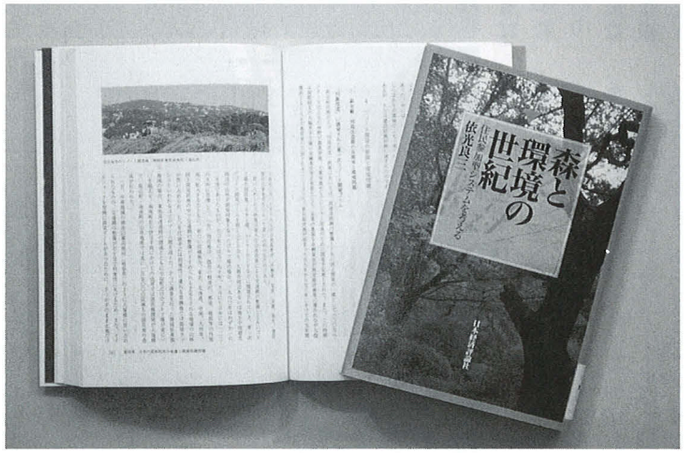
森林破壊は自然破壊の一つの象徴である。その背後には人口、貧困、科学文明、経済至上主義、無知など、多くの原因がお互いに深くからみあって悪循環をする一種の「構造」として存在している。

この荒廃、破壊をいかにして、食い止め、復元し、人類と森林が「共生」する社会を築く、かということは、まさに人類に課せられた最重要課題の一つである。

著者は三十年にわたり、一貫して森林環境問題に取り組んできた。本書で、著者はその豊富な知識をもとにこの課題の根源を突き、住民参加型のシステムによる解決への道筋を、分かり易く提言している。

環境を維持すること自体、〝価値〟のあるもので、その恩恵に対して対価を払うのは当然である、という常識形成のためにも有意義な出版物である。

学術的背景のもとに、森林破壊の背後にある「構造」にメスを入れ、人類が生みだした自然破壊の悪循環を断ち切るための具体的提言を行った啓蒙書として高く評価された。



審査は今井嘉彦、瀬戸勝男、西島芳子、吉竹博、内川清輔、田村安興の各氏に筆者を加えた七名で行われた。

（なかうちみつあき／高知大学元学長）

第16回「写真コンテスト・高知を撮る」の審査を終えて

キレイな写真と伝わる写真

和田健一

毎回そうなのだが、応募作品のなかに現在の写真に混じって、およそ一割ほどの昔の写真がある。昔の写真といっても、せいぜい昭和三十年前後から四十年ごろのがほとんどなのだが、そうした新旧の写真を眺めていていつも感じることは、そのインパクトの違いである。もちろん現在を撮った写真のなかにも、強い印象を与えるものもあるにはあるが、昔の写真は不思議と粒が揃っている。なぜそれほど魅力があるのだろうか。

今では手軽にカメラを持てるようになって、誰でもシャッターを押せば、そこそこの写真が撮れるようになった。が、昔はそうではなかった。カメラを買うにも一大決心がいり、写真への意気込みも今とは比較にならなかったのではないか。そんな撮影者の在りようが写真に現れてくるのではないか。

松山に住む友人のカメラマンにそんなことを尋ねると、

今は偏光フィルターをつけたままにして、空を真っ青に出してコントラストの強い写真をつくるアマチュアカメラマンが多くなっている。「キレイ！」な花鳥風月風の写真を撮るプロのカメラマンの責任もある。アマチュアカメラマンは、もっと、もっと、写真を撮ることを楽しんでほしい。もっとブレた写真があってもいいし、そのブレを楽しむ目を持ちたい。

と語っていた。せっかく小さく機動性のあるカメラを持っているのに、重たい三脚をいつも担いでいるアマチュアカメラマンがいるが、三脚を捨ててもっと自由に写真を撮ってほしいともいっていた。

確かに「キレイ」な写真を撮る自称プロカメラマンも少なくない。キレイな写真はたとえば絵はがきなどには格好のものだが、そんな写真をいくら見せられてもありがたくもない。数日前、ステージの音響装置の仕事をしている友人が、CDと七〇年代に録音された外国のレコードを聴いて三十年、この八年前ぐらいに、やっといい音が解り始めてきたといっていた。いい音楽を聴くことで耳が肥えてくる。いい絵を見ることで目が肥えてくる。それは料理だって同じだし、写真もいい写真を見れば見るほど、写真がわかってくるのではないかと思う。

話が逸れてきたが、写真展で昔の写真がただ懐かしいだけではないことを知ってほしかった。

さて今回の応募写真のなかで印象に残った作品は「新京橋埋め立て」と題した清岡義道氏の作品で、これまでも何度か氏の作品を見る機会があったが、こんな部分にカメラの目を向けることだけでも、作者の力量を窺い知ることができる。

逆にこんな写真はもう止めようと思うのは、例えば道路やなにかのテープカットの写真である。およそテープカットというのは、どういうわけか、ほとんど汗を流していない「お偉い」人間が行うものと相場は決まっている。そんなものを撮っても面白くないだろうし、なんの記念にもならない。これなども報道写真の悪影響だろうが、どうせ撮るのであれば、テープカットに至るまでに汗水流して働いている人たちの方がよほど面白いのではないか。

ついでにいっておくと、解体されるプールの飛び込み台にノミを入れている写真がテープカットとは逆の意味合いながら、テープカットをしている風で面白くなかった。本来はなかなか面白い図で、もっと近づいてノミを入れている人の表情まで写し撮っていればもっと面白い写真になったと思う。

すぐ横道に逸れるが、他に前回特選を取った岡田文夫氏の四点の作品（二点だけ準特選となった）や中井秀夫氏の「薬草売り」、坂本巌氏の組写真「城西市場」、森田清一氏の「田村遺跡群」も印象に残った。横矢実穂氏の魚礁にするために船を沈めているところを撮った「沈船」が特選になったのは、ジャーナリスティックな嗜好が働いたものだろうか。

前回同様に準特選と特選の間にはそれほどの差はない。しかし、二、三点の作品を除けば準特選と入選の間にはいささかの差がある。この差を敢えて数字で書いておくと、全体を十点として、落選と入選の間にはおよそ二～三点入選と準特選の間には五～六点準特選と特選の間には二点ぐらいの印象がある。むろん個々の作品によって違うのだが、少なくとも毎回こんな差がある。

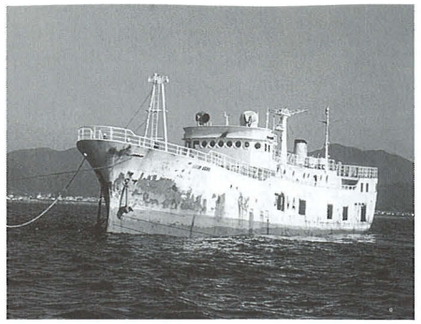
ここに書いたことすべてはあくまでも私個人の意見だが、他の審査員にはまた違った見方をしている人もいると思う。だからこそ公平さが保てるのだろう。

（わだけんいち／月刊「土佐」編集発行人）

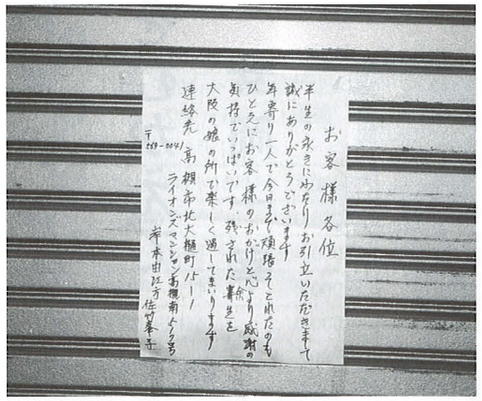
「第16回写真コンテスト・高知を撮る」作品展は、3月に市民フロアで開催しました。入賞作品は14ページのコーナーでも一部紹介していきます。

新京橋埋め立て　清岡義道

薬草売り　中井秀夫



沈船（２枚組み）　横矢実穂



城西市場（闇市）解体（３枚組み）　坂本　巌

北川村「モネの庭」マルモッタンの開園をむかえて

安岡一幸

事の始まりは柚子とワインの交わりからでした。

北川村は、過疎の典型的な山村です。産業は、主に農業。とはいえ柚子の生産量は全国有数。その香りは、全国一との評価を得ていますが、その柚子農家でさえも後継者不足や高齢化が進み、生産意欲の衰退という厳しい状況となっています。そこで、柚子を軸とした地域農産物などの消費拡大と、地域に生きる人々の活力、この二つを共存させた新たな事業を――。それが、柚子ワインの生産でした。ワイナリーは当初の予定よりも規模が縮小され、現在は一棟の建物の中に収まり、柚子やヤマモモなどのワインを製造しています。

「ワイナリーでなければ、何がえいやろう?」。ワインといえばフランス。フランス文化といえば芸術。北川村と芸術。北川村には豊かな自然と光がある。芸術・自然・光から連想できるものは、『印象：日の出』を描いたクロード・モネ。というところから、調べていくうちにモネが浮世絵に影響を受け、自らが絵を描くために〝日本風の庭園〟を造るほどの親日派だと分かったのです。

彼が造った庭は、自然を生かした光と影が巧みに組み合わされ、彩りあふれる庭であったことから、北川村の自然にマッチする上に、高知県東部の観光・文化拠点づくりという観点からも、このプロジェクトに到達したのです。

一九九六年秋、フランス・ジヴェルニーのモネの庭を見学。村の担当者が「この庭を見て肌で感じ、本当に感動し、気に入ったからこの庭を北川村で再現したいので、協力していただけないでしょうか」と素直に訴えたことが、管理責任者のヴァエ氏の心に留まったのでした。彼は自らが書き上げたモネの庭の図面と共に、親切にアドバイスをして下さいました。それ以降、担当者たちは試行錯誤をしながらも、フラワーガーデン整備の形を造ることができたのでした。

一九九八年十二月には、ヴァエ氏夫妻を村に迎え、整備中の公園に対する現地アドバイスや村民に対してガーデニング講習を開催。この公園に関わるグループの方たちとも親睦会を開き、より一層の絆を深めて北川村の取り組みやどんな村なのかを理解していただきました。

一九九九年七月の訪仏では、モネの庭に勤める方やその地域の方との交流会、モネが苗を仕入れていた植物庭園の訪問、モネが咲かすことが出来なかった〝青い睡蓮〟の苗の購入。同年十月にはフランスの美術界最高機関のアカデミー・デ・ボザール（モネの庭を統括している団体）の終身書記であり、モネの収蔵画でも著名なマルモッタン美術館の館長アルノー・ドートリヴ氏に面会し、当公園の名称〝北川村「モネの庭」マルモッタン〟を贈られました。

この公園は、モネがこよなく愛したジヴェルニーのモネの庭から「池の庭」と「花の庭」をモデルに創られています。

「池の庭」は優雅な丸みを持つ太鼓橋、睡蓮の植えられた池が落ち着いた雰囲気を漂わせています。ジヴェルニーの池の庭は、モネのキャンバスとも言われていました。大きな柳越しに見える緑の太鼓橋は、モネの日本文化へのこだわりが見え隠れし、モネが生涯のテーマとした〝次々に移り変わる水と光の動き〟をご覧いただけます。水面に映る木々や草花の様子は、土佐のまぶしい光と青い空を反映して、季節ごとにその姿をかえていくことでしょう。

「花の庭」は〝まるでパレットのようだ〟と比喩されたフランス風の繊細で美しく、色彩豊かな庭に設計されています。赤・オレンジ・黄色・青色などの色が、区分けされた花壇や花のアーチに散りばめられ、訪れるたびに新しい風景をご覧いただけることでしょう。

光あふれる「モネの庭」（北川村『モネの庭』マルモッタンへは高知駅から車で約80分）

いつも観光客で賑わうジヴェルニーのモネのアトリエと家をモチーフにしたギャラリー。館内二階にはモネの名画をレプリカ展示のほか、北川村とジヴェルニー村の交流の様子を伝えるパネルなどが展示されています。一階のAVライブラリーでは、ジヴェルニーのモネの庭やマルモッタン美術館の映像がご覧いただけます。そのほか、モネの画集やガーデニングに関する書籍が閲覧できるライブラリーコーナー、モネの絵画のポスター・絵皿・Tシャツなどのミュージアムグッズと、地場産品、地元のクラフトグッズなども豊富に揃えた売店が併設されています。

レストランでは北川村特産の柚子を素材とした料理や、モネにちなんだ料理など、バラエティー豊かな料理をサービスします。また手作り工房では、お母さんたちの真心がこもったパンやアイスクリームなどをお楽しみいただけます。

庭は生まれたばかりです。これから、十年二十年の長い歳月をかけて大きく育っていくことでしょう。モネが〝本当の傑作〟だと思った庭のように……。

（やすおかいっこう／㈱きたがわ ジャルダン取締役支配人）

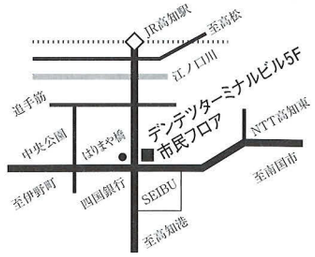
●広さ・内装　約96㎡・壁面布クロス張り
スポットライト完備

●使用料

展示	1日（9時～18時）	11,000円
	1週間	70,000円
会議	9時～12時	4,000円
	13時～17時	5,000円
	17時～21時	5,000円
※休館日	毎週水曜日（搬入・搬出日）年末年始	

市民フロア

個展・グループ展・会議に最適！

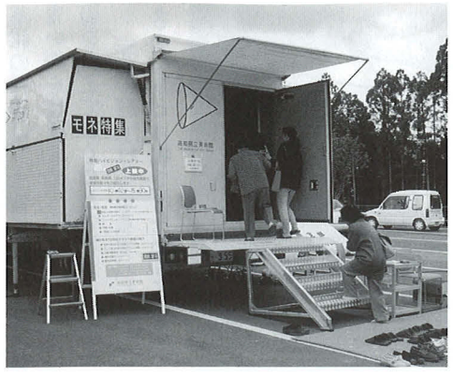


◆お問い合わせ
㈶高知市文化振興事業団
☎873－4365

動く美術館

北村修啓

『全国で3番目　これが「動く美術館」』という見出しで移動ハイビジョンシアターが地元新聞に紹介されたのが五年前。これまでに東は室戸市から西は土佐清水市まで、県下一一八カ所で延べ八千人を超える方々に映像による美術鑑賞を楽しんでいただきました。

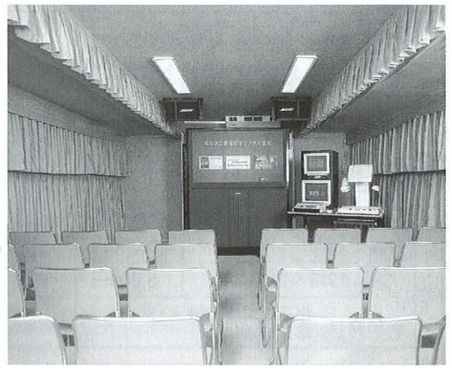


移動ハイビジョンシアターは、美術館の重要な事業のひとつである教育普及活動と位置付け、地理的事情やその他の理由で美術館に行くことが困難な方々だけでなく、学校現場や文化サークルなど広範な団体等を対象に美術鑑賞の機会を提供しています。

この移動ハイビジョンシアターは、平成七年度に約七千万円を投入し箱型の四トントラックを改造したもので、およそ三十分間で三〇人を収容するミニシアターに早変わりします。リフトを使えば車椅子でも楽に乗ることができます。車内には六五インチの大画面とハイビジョン画像再生装置を搭載し、当館が全国に誇るシャガールや絵金の作品をはじめ、印象派の作家を中心とする一九世紀フランス美術など全六タイトル六〇番組の中から、御希望の番組を選択していただくことができます。名画の数々が大画面に鮮やかに再現され、プロのナレーターによる作品解説と映像に溶け込むようなサウンドが流れると、鑑賞する人の心はたちまち「美の世界」に引き込まれていきます。

しかし、日本初の車載タイプ「動く美術館」の過去の利用実績をみると決して満足できるものではありません。学校や老人福祉施設、公民館などに案内書を送付したり、マスコミにも取材していただくなど、精いっぱいの広報活動を行っているのですが、まだまだ一般に知られていないのが実情です。場違いではないかと思われるかもしれませんが、人出の多い市町村主催の産業文化祭会場や各種イベント会場に出没したり、県内各所の「道の駅」に陣取って上映するなど、目立つよう努力をしているのも県民の皆様に認知されたいがための一種のデモンストレーションなのです。少なくともこの記事を読まれた方は、どこかで移動ハイビジョン車を見かけても「献血車」や「検診車」と間違うことがないものと信じています。

では、移動ハイビジョンシアターを開催するにはどのような手続きが必要でしょうか。基本的には利用者に営利の意図さえなければ問題ありません。もちろん上映のためのスタッフや費用は美術館が対応しますので心配無用です。少しでも興味や関心を持たれたならば、迷うことなく美術館に御一報ください。日程調整さえつけば即断即決、あとは簡単な事務手続きのみ。四トントラックが進入、駐車できる道路、スペースさえあれば、たとえ地の果てでも馳せ参じる決意です。



あなたの街で、あなたのお仲間と御一緒に心ゆくまで「美の世界」を満喫してみませんか。

◎照会・資料請求先
高知県立美術館　学芸課　北村
TEL〇八八・八六六・八〇〇〇
FAX〇八八・八六六・八〇〇八

（きたむらおさひろ／高知県立美術館学芸課長）

ぐうの音も（一）
―詩作りと誌作り―

西岡寿美子

時折り、聞かれることがある。

「生き方を、一言で言えばどうでしょう」

「うーん、どうでしょうねえ。『後（あと）へ這う』とでも言いますか」

苦し紛れに、ついつい口走ってしまうのがこんな言葉である。

後へ這う、は、金銭的に利益にならない、損失をこうむる、と言う意味だと高知県方言辞典にある。金銭に限らず、労が報いられない。無駄骨を折る。つまり「あだこと」に力を費やして、世の嘲りを買う意に使われることの方が多い。

あだこと、も方言で、こちらは無駄なこと、役に立たないこと、の意である。「あだことをして後へ這う」と重ねれば、よりわたしの実態に近くなろうか。百を失って五を得る体のことを続けて来た感慨が、我知らず、そんな言葉となって転がり出るらしい。

わたしの一族は総じて質実で、文学などと言う「あやかしい」ことは、受け入れない体質である。「詩を作るより田を作れ」的体質は、わたしの中にも少々はある。

確かに、農林漁業にせよ、商工業、サラリーマンにせよ、対価が明確な働きに比べ、一括りに表現者と呼ばれる人種は、生活基盤が胡散（うさん）くさい。作品への対価は、まず期待しがたい。別にマイナス志向ではないが、結果が常にマイナスでは、前者の実業に対し、虚業と蔑（さげす）しめられても反論できない弱みがある。

ここが、一族から指弾されるところで、法事などで集まることがあっても、話題がそちらへ向かわぬよう、なるべくお運びなどを志願して、そ知らぬ顔を決め込む。

実を固めず、虚を追い求める道楽者、と言われれば、ぐうの音も出ない。三十余年も詩誌に入れ上げて来たのは周知の事実だからである。その労と金を、もっと人並みの幸せらしい暮らしに使え、女だてらに。などと切り付けられたら、どう言い解けば価値観の相違を理解して貰えるものやら。後難を思えば戦わぬ先に降りるに限る。

自分がやっていて言うのも変だが、同人誌活動そのものも、考えれば「あだこと」である。詩に限らず、小説、短歌、俳句、川柳、どの分野でも、百人が百人、商業誌に売れる、訳ではない。そこで、自分らで発表誌を持ち、仲間との交流と自己研鑽を図るべく、労と金を負担して作品を活字化する。これが、同人誌発行の大義名分ではあるが。

趣旨は悪くないとしても、どこまでもアングラ（実験）。困るのは、一度嵌まるとミューズ（美神）だか、デーモン（悪魔）だか、アヘン毒だかが身に回って、止めると禁断症状が起こることである。

救いは、現今では総人口の何割かが同人誌に拠っているとも聞くから、事柄自体は珍しくはなくなって来ているのだろう。それでも、美神か悪魔かにひれ伏して、性悪の金食い虫風のそれに骨までしゃぶられている、と外からも見える人間となると、まだまだ希なのであろう。健全な精神からの、その「あやかしさ」への不信、あるいは不審が、枕の類のご質問となるのではあるまいか。

（にしおかすみこ／詩誌「二人」編集発行人）

高知を撮る　**鮎釣り**（昭和36年　高知市上町５丁目付近）

第16回写真コンテスト入賞作品

岡田文夫

昭和36年当時は、5丁目付近の鏡川でもよく鮎が釣れた。
解禁になると、釣り人でたいへんな賑わいであった。

医療ビッグバン

風俗歳時記

患者にとっては有利な話であるらしい。

だが、医療界には、激震が走るであろう。

にもかかわらず、当事者である厚生省や日本医師会などが、まるで対岸の火事でも眺めているように、鷹揚に構えているのが気にかかる。

かつて、これと同じような光景を見たことがある。

１９７５年、東京で、第29回世界医師会総会が開かれ、〈インフォームド・コンセント〉（以下、ＩＣ）に関する改正案が採択された。

しかし、医師の間でＩＣが話題にのぼるようになったのは、それから10年後。さらに、行政や医療界全般が、ＩＣを強く意識するようになったのは、実に、20年後の95年。

同年、「厚生白書」も、日本医学会総会も、初めて〈ＩＣ〉をメーン・テーマの一つに採り上げたのである。

このような国際感覚の欠如は、医療界にとどまらず、政界をはじめ、日本の各界に共通している。

本年２月８日の各紙は、「米国製薬大手のファイザーが、ワーナーを買収して、世界第２位の医薬品会社になった」と報じた。

世界の医薬品業界においては、生き残りをかけた熾烈な競争が着々と進行している。

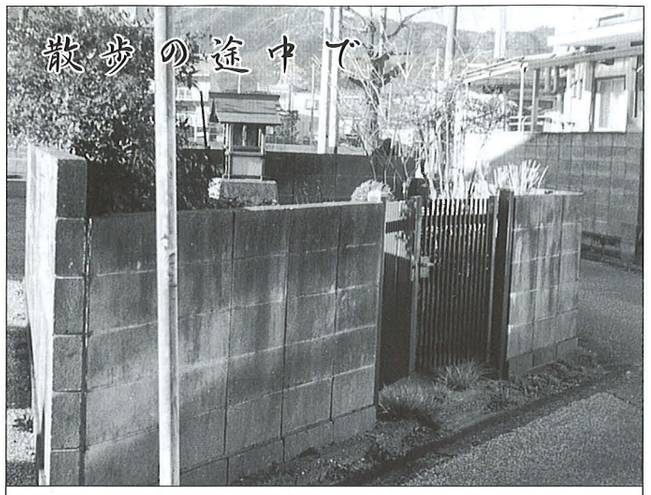
これは、医療界におけるグローバルスタンダード化の一例に過ぎない。

日本の医療市場は、約30兆円といわれている。しかも、その門戸開放は、すでに、93年のウルグアイ・ラウンド（多角的貿易交渉）で約束済みであり、その約束は、ＷＴＯ（世界貿易機関）に引き継がれている。

いまや、外国資本は、日本の健康・福祉関連サービス参入の機会を虎視眈々とねらっているのである。

〈金融ビッグバン〉による金融業界の天地がひっくり返ったような大騒動を、横目に眺めて、太平楽をきめこんでいる医療界も、いまに周章てふためくことであろう。

（朴）



庭付き一戸建て、江ノ口小学校徒歩１分、南向き角地、日当たり良好。不動産屋の店先の張り紙ふうに言えばこうなるか。町なかには今も小さなお社が人家や商店の間にちょこんとおさまっていたり、ちょっとしたスペースに大切にまつられているのをよく見かけるが、こちらの神様はご近所の家々と同様に立派な門扉を構え、表札や呼び鈴があってもおかしくないように見える。「ピンポーン」と鳴らせばどなたが出てくるのだろう。

風俗

シーサーのある家

沖縄本島から石垣島に渡った。次の日同行者と共に島内を巡ったが、その途中で由緒ある旧家を訪れた。丁度大規模な修復工事の最中で、庭園に立っている一行の周囲を職人達が忙しく往来していた。

本島では家々の屋根や塀の上の多くにシーサーを見た。沖縄独特の魔除けの獅子頭だ。それがこの家には見当らない。旧家なのにそれが無いとは、と一行が話題にしていると、横を通りかかった高齢の職人が少々強い語調で言った。「ここは石垣なんですから」と。

話を聞いてみると、元々シーサーは沖縄本島の習慣で、独自の文化圏である八重山諸島のここ石垣では用いないのだと言う。その老いた職人は自分の語調を恥じるようにその後で、最近は本島との住民の交流も多くなり石垣でもシーサーのある家もできてはいるんですがと付け加えたが、その思わず「ここは石垣だ」と口走ってしまった彼の心情が後々まで心に残った。

後日シーサーの形の土器に入れた泡盛を入手した。中身はとっくに消えてしまったが、我家の改修をした機会にその土器を塀の端っこに取り付けてもらった。庭木に覆われて外からは目立たないが、もしかすると高知市で唯一シーサーを頂いた我家であるかもしれないと良い気分だ。しかしその顔を見ていると、生半可な知識で地方文化を判ったつもりになる愚かしさをしっかりと説かれているような気になってくる。

（南北）

高知の農業

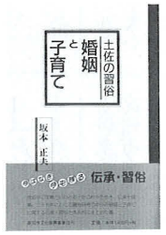
山岡　浩 著

Ａ５判・並製本・248頁
本体価格　1,800円

農協組織に半世紀近く勤めた筆者が地域農業・農産・農に生きる人々をつぶさに訪ね高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的産地づくりの事例を紹介した書。

土佐の習俗
婚姻と子育て

坂本正夫 著



四六判・並製本・200頁
本体価格　1,400円

民俗学の宝庫といわれる土佐の村々を歩き、土地の古老たちから伝承を採集。35年にわたる調査研究の中から婚姻と子育てに関する伝承・習俗を体系的にまとめた書。

今号の表紙

「自然の一角」　浜田　耕一

もう数年前のこと。季節が冬から春に変わろうとするときでした。高知大学農学部に写生に行ったとき、その敷地内にこんなところもあるのかと思って、とっさに描いたものです。

ほとんど風景を描かない私の、懐かしい作品となりました。

（はまだこういち）

文化高知 No.95 [隔月発行]
2000年(平成12年)5月1日発行
財団法人 高知市文化振興事業団

高知市文化振興事業団 出版案内

外崎光広 著
土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。
A5判・上製本・四二四頁 本体価格二、七一九円

外崎光広 編
土佐自由民権資料集

土佐自由民権に関する基本的資料百十余点を事件別に分類・収録。原資料によって各々の事件の実態が把握できるようにした。
A5判・三四四頁 本体価格三、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義 編
高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。
A5判・上製本・七三六頁 本体価格六、〇〇〇円

依光裕 編著
珍聞土佐物語(上巻)
——五十人の語り部たち

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百三十話を収録。
四六判・三九二頁 本体価格一、五五三円

依光裕 編著
珍聞土佐物語(下巻)
——五十人の語り部たち

県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。
四六判・四〇八頁 本体価格一、五五三円

岡林清水 著
高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く〝旅のなかの文学史〟ともいえる文学案内。
四六判・二七八頁 本体価格一、七四八円

山本大 著
幕末の青春
——坂本龍馬の生涯

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。
四六判・一六八頁 本体価格一、一六五円

藤本稔子 著
思いっきりみとめて子育て
——子育て 個育て 親育ち

保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育っていく過程を描きながら子育てを考える。
四六判・三五二頁 本体価格一、五五三円

高知市文化振興事業団 編
わがまち百景
——21世紀に伝えたい高知市の風景

高知市の誇りとして残したい風景を百カ所選定し、百人の随想と写真で紹介。様々な視点からの素晴らしい高知が実感できる。
A5変型判・二二四頁 本体価格一、一六五円

高知市文化振興事業団 編
高知のエスプリ
——ふるさとの未来(あす)を考える

県内のオピニオン・リーダー五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。
A5判・一六〇頁 本体価格一、一六五円

高知の文化を考える会 編
高知の文化を考える

文化について多方面から検討、豊かで個性的な市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。
A5判・一八八頁 本体価格一、一六五円

清水孝之 著
中山高陽

土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。
A5判・上製本・三六二頁 本体価格三、八〇〇円

筒井広道 著
画帳の歳月

高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。県展の知られざる内情、肩のこらない絵画論等、興味尽きない美術への誘い。
A5変型判・上製本・二五六頁 本体価格一、九四二円

高木啓夫 著
土佐の芸能
——高知県の民俗芸能

現存する土佐の民俗芸能をくまなく収集し体系化。それぞれを神楽・獅子舞・地芝居・太鼓踊り・民謡等に分類し、詳説した。
B5変型判・上製本・三四六頁 本体価格四、八〇〇円

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編
土佐弁 土佐日記

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。
B6判・上製本・一三〇頁 本体価格九七一円

高知県緑の環境会議 森林研究会 編
高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかかわりの歴史、現地への道のり等を紹介。
B5変形・二二八頁 本体価格二、四二七円

〒780-0870 高知市本町五丁目2番3号
TEL&FAX(088)873-4365/郵便振替01680-5-14869
http://www.i-kochi.or.jp/hp/bunshin
E-mail bunshin@i-kochi. or. jp